

—第20回私塾・清里銀河塾—

学芸大学外国語・外国文化研究講座

公開講演・多文化共生とダイバーシティ「在日韓国朝鮮人と多様性」について

2023年6月5日(月)16:30~18:30 N304号室

講師:河正雄

【講演要旨】

日本における多文化共生とダイバーシティ(多様な働き方や雇用の機会均等)の現状について、在日コリアン2世として、様々な文化活動とともに在日社会と母国と日本の架け橋になって来た行程、「在日韓国朝鮮人と多様性」について以下の講演を行う。

- 1.はじめに
- 2.河正雄の生
- 3.コンセプトは「祈り」
- 4.田沢湖の姫観音
- 5.私塾・清里銀河塾について
- 6.おわりに

1.はじめに

「人間の優しさとは何か」というテーマを一貫して追求している灰谷健次郎は「一人ぼっちの動物園」で著した言葉を引用する。

「あなたの知らないところに
いろいろな人生がある
あなたの人生が
かけがえのないように
あなたの知らない人生も
またかけがえがない
人を愛するということは
知らない人生を知ることだ」

また人間への信頼を失わず誠実に生きた武者小路実篤は「人間の言葉の内、美と愛が最も美しい。そしてこの二つが人生を無味乾燥から救ってくれる。この二つのものに人間が無頓着につくられていたら我等が生まれたという事は実に不幸な事であり、救いのない世界に投げ出されたことになる。幸い我等は愛と美を感じることができる。このことは喜ぶべきことである。」

と「人生論・愛について」で著している。

教育研究者大田堯(たかし)は「『私の恐れているものは、ただ一つ。お金です』とマザー・テレサはイエスを裏切ったユダの動機がそれだ、と言う。

いま、私たちの社会の『退廃現象』の根源はやっぱり金だろう。お金は人類の知恵が生み出した重宝なものだが、いま、さまざまなメディアにのって、もっぱら人々の欲望肥大を促す情報の源でもある。

欲望肥大は自己中心へのすすめにほかならない。社会的無関心、そして、閉じられ

た孤独化、愛への飢えへと向かい、社会組織の壊死へと導きかねない。」

と事態克服は難しいと嘆いている。

世界はグローバル社会、時代という。「人を愛するという事は知らない人を愛することだ」「人間の言葉の内、美と愛が最も美しい」と言うが、多文化、異文化、共生社会の具現には今だ難問、難関がある。

2.河正雄の生

私は東大阪市で 1939 年に生まれ、84 年の歳月を日本で生きている。生まれた年に第 2 次世界大戦が勃発し、朝鮮人に対する創氏改名令と徴用法が施行され日本名・河本正雄と名乗りました。

その時、日本は中国との戦時下にあり、2 年後には太平洋戦争となりました。戦争の時代に生まれた悪夢が心の深層に刻まれ、平和への希求が一生のこだわりとなって生きて来ました。

日本の敗戦後、私は真正の朝鮮人となったのです。その 2 年後、祖国は南北に分断される戦争が起きて 38 度線を境に分断国家となり 1965 年、韓日国交正常化以降に韓国人となったのです。

その後、在日社会は南北分断によるイデオロギー闘争で深刻な亀裂を生みました。後生に続く葛藤は深い傷となりました。敵対し争うことよりも共に力を合わせ在日が一つとなって生きる知恵を失ったことが惜しまれます。

祖国では全羅道、慶尚道であるとかの出身地で、日本では朝鮮人、祖国では親日派、パンチョッパリと差別され四重五重の精神的苦痛の中を生きて来ました。

我が家は父母の代から数えて 4 世代 98 年に至る在日の歴史を刻んで来ました。父母が生前、「生きていれば良い事も悪い事もあるものだ」と良く語っていましたが、在日の喜怒哀楽は何事もなかったかのように夢幻の如く流れ去りました。

父母や私の生涯の願いである祖国の平和統一の夢はいつも淡雪の様に降っては消え去り、無常感が募るばかりの虚しい 84 年であります。

在日には故郷があるようでない。日本で生きるには日本人以上に日本人であることを求められ、韓国では韓国人以上に韓国人になることを求められる。それは、そのどちらにも存在を認められていない現実を突きつけているのです。

韓国人としての誇りを持つ一方で、日本で生まれ育ち、ここでなくては暮らすことができないという思いと葛藤が常にある一生でした。両国の狭間に生きる在日には、その長所と短所を学び人間としての品格と人格を備えて生きていく独自の視点と哲学、処世術を学んで生きて来ました。

日本には 70 万人の在日同胞が住んでいます。今や在日は 6 世代となり日本を我が故郷、祖国とも思っているのです。在日は祖国発展への寄与と日本社会への貢献など定住、定着志向を鮮明にして日本社会で尊敬される模範的市民となるよう努力しております。

韓日の友好親善に積極的に寄与し「共生・共栄」の精神で「懸け橋」としての役割を担う衿持を抱いているのです。

その狭間で生き抜く在日の試練は、コリアン・ディアスポラとして分断国家の国民としての宿命であり、運命でもあるのです。

—四柱推命鑑定結果—

「気性が快活で勇ましく剛直な方で骨格や体型がよい、外見的にも相手を圧倒する長所を持っています。

自己中心が確固とした方で時間がかがっても目標を実現する強い意志を持っています。広い度量と慈悲心を持ち、推進力と勇気があるのでいかなる環境にも自分の目的を実現しますが、結婚が遅くなったり、もの事の結果が遅くなる場合がある。

いわゆる『大器晩成』の運命を持って生まれたと見られ、自らも中間過程の結果に満足しないタイプであります。

指導力が優れ、社交的で進歩的な態度で相手を対し激烈な争いより冷静に自分の意見を主張する人です。周囲の助力があつたり、環境の変化があれば大きく達成する運であると見られる。」

私は占いや八卦を殆ど気に留めず、信じていなかった。しかし 30 代半ば頃に韓国の友人が私の運勢を勝手に占い、送って来た。老いて、この占いの内容を読み直してみると、今年ダイヤモンド婚を迎え結婚が遅くなるというくだりを除いては全体的中していたことに息を呑み、納得しているので紹介させていただいた。

3.コンセプトは「祈り」

秋田県仙北市田沢湖町で学んだ小学生の頃から私は絵を描くのが好きでした。秋田工業高校時代は美術部をつくって思う存分絵を描いていました。

当時県展に出品して高校生として初めて入賞しましたし、他の公募展なども出品したら賞が取れました。

しかし絵描きになろうとは思いませんでした。高校を卒業する時に、差別のせいかどこの企業にも採用されませんでした。そこで実力だけでやっていける絵描きになろうと思いました。

しかし母が猛烈に反対しました。絵描きでは飯は食えない、長男が絵描きでは河家の未来はないと母は描いた絵を破き、画材を川に投げ捨ててしまいました。それでやむを得ず、画家の道も途絶され挫折したのです。

日本での展望を失い、一時は北朝鮮行きも考えましたが、なんとか在日同胞組織の仕事などをして踏み止まりました。転機になったのが 1963 年に結婚した時のことです。町の電気店から家電製品を買ったところ、店主から「資金繰りの関係で月賦

で買ったことにしてくれないか」と言われ印鑑を貸しました。

数か月後、月賦会社から私に請求書が来ました。店主に問い詰めると、「実は経営が行き詰まり月賦会社に支払えなかった。再建するので名義上の社長になってほしい。自分たちはあなたの下で働き迷惑はかけない。」と言うんです。

名義上、仮の社長になったところ、今度は集金したお金を着服し出したんです。そこで全員をクビにして、止む無く本腰を入れ電気屋をやることになりました。

この時ちょうど東京オリンピックが開催される年に運良く重なりました。カラーテレビブームでテレビが売れまくったんです。それで経済的に余裕が出来、美術品を集めるようになったんです。果たせなかった画家の夢を在日同胞作家に託し、支援しようという男気でした。

もうひとつは全和凰の作品との出会いです。最初は向井潤吉の作品を買おうと新宿伊勢丹のギャラリーに行ったのですが、全和凰の作品『弥勒菩薩』をみた時に釘付けになってしまい、その場で買い求めました。それがコレクターになったきっかけです。

また働きながらも絵を描き日本アンデパンダン展に出品していました。そこには曹良奎や全和凰、宋英玉といった在日の作家達も出品しておりました。そこで在日作家を知る事で、彼らの作品を集めるようになったのです。

在日作家の絵には、在日同胞の祈りが満ちていました。根の部分に苦難の時代を経きた在日の“恨”がありました。朝鮮人の心を表現する言葉の“恨”は一般的な恨みの意味ではありません。「遂げられない心の嘆き、やるせなさ」といった意味なのです。絵を集めたところ、在日の苦痛、苦悩の生を表現した内面世界を描いたものが多く共感したのです。

全さんは拳を上げて銃を持って闘え、というような絵を後半生は描きませんでした。仏様の絵をよく描き、平安を祈るような静かな祈りに満ちた世界でした。

宋英玉の『闘牛』は、韓国と日本が戦っている絵でもあれば、北と南が戦っている

絵でもあります。ここには戦いの本質への問いかけがあります。彼の故郷は済州島ですが、風物である闘牛を描いて故郷を偲んでいるのです。

私の故郷の田沢湖周辺では、戦争中水力発電所建設などのために朝鮮から徴用で多くの人が働かされました。私の父も自由労働者として徴用の人達と一緒に働きました。

子供の頃、そこで事故や寒さ、栄養失調や 病気などでたくさんの方が亡くなったと聞きました。集めたコレクションを生かして、犠牲に遭われた方達、無縁の仏様を祀る田沢湖畔に「祈りの美術館」を作ろうと思い立ちました。

田沢湖町は「河さんの計画はヒューマニズムに溢れ、感動する。町の観光にも役立つので美術館を作りましょう。」と行政のほうも乗り気でしたが、いつしか消極的になりました。

表向きは町の財政上の理由でしたが、80 年代後半に入り韓国内で日本の戦後補償問題が起こり歴史教科書、徴用法による強制連行や従軍慰安婦、朝鮮人被爆者の賠償問題などの諸問題が噴き出して来ました。韓日の政争に巻き込まれる事を恐れた町当局は「祈りの美術館」計画に怖じ気づいたのではないかと私は思います。

民族の統一と和合を祈り、韓日の平和と安寧を祈りたいだけの動機であった「祈りの美術館」設立の夢は挫折したのです。韓日の政治問題の犠牲となり御破算となったのです。

1993 年に父の故郷である光州へ視覚障害者福祉事業の為にたまたま訪れました。その時、地方で初めて出来た光州市立美術館に収蔵品がなくて運営出来ないことを聞かされました。

「光州を愛して下さい。光州を育てて下さい。光州を助けて下さい。」という市の懇請から作品を寄贈することになったのです。なによりも祖国が困ったときに助けてあげるのは、人間として最高の名誉に思いました。

光州では 80 年に民主化を要求した市民が軍に虐殺された光州事件が起きています。そして民衆抗争の末に光州市民は民主主義を勝ち取りました。在日もあらゆる差別のない人権を獲得する為、闘い生きてきたのです。

光州は闘いを象徴する場所で痛みを分け合ったという共通の絆を感じたのです。その意味で、田沢湖で祈りの美術館を作れなかったが、光州で役立てるのも良い事だと思ったからです。

河正雄コレクションのコンセプトは「祈り」。平和への祈り、心の平安への祈り、愛と慈悲心に溢れた祈り、犠牲となった人々や虐げられた人々、社会的な弱者や歴史の中で名もなく受難を受けた人間の痛みへの祈りです。

韓日の痛みの歴史の中で在日に生まれ、在日に生きた私の心の事柄、持ち方、精神、心の有り様が私のコレクションなのです。

日本では「金にもならない、名もない在日の画家の作品を集めても、末は公害か廃棄物にしかないだろう」と見下げられ叩かれました。

1993 年に寄贈した光州でも「ゴミのような在日の作品を寄贈した」と罵られ、「ゴミもここまで集めれば立派な宝物だ」とも椰楡、卑下されました。

種を蒔き、木を植える事は容易いが、これを育み花を咲かせて、実がなるまでには忍耐と弛まぬ努力、愛情と精神力が必要です。試練を乗り越えてこそ実るのです。特に文化芸術界においては言を待つまでもありません。

韓国は文化芸術に奉仕と投資をする国を挙げての国策となり、今や時代の風向きが変わりました。在日 2 世が 50 数年をかけ美術を愛し、美術に全人生の命をかけたコレクションは韓日の国民、いや人類のコレクションとして結実したのです。ゴミなどでは決してありません。歴史遺産であり記録遺産、人類の宝なのです。

在日二世の私が如何なる想いで在日を生きたのか。在日の生の全てに美術があった事、美術を通して両国の海峡に相互理解と美術文化交流の架け橋を架けようとし

て生きてきた結晶なのです。

4.田沢湖の姫観音

田沢湖畔に姫観音が建立されたのは私が生まれた1939(昭和14)年11月10日のことである。その姫観音像に刻まれている碑文の主旨は玉川の毒水が田沢湖に入り込んだ為、死滅した魚と湖神・辰子姫の霊を慰めるというものであった。

田沢湖町観光課は1981(昭和56)年に荒れ果て放置された姫観音像の周りを整地し姫観音の由来を解説した掲示板を掲げた。その案内文を紹介する。

「姫観音像

いにしえ、辰子とよぶ村の乙女が、永遠にかわらぬ美しさと若さを保ちたいと大蔵山の観音に祈った。

満願の日、俄かに山は砕け水をたたえた精澄な湖が成りて女は蛇体に変じて湖の主になりたまふた。

それより村の人は、姫をあがめ、湖水の清浄を守り伝えて来た。

しかるに昭和十四年に東北地方振興のため、仙北平野の開拓と水力発電に田沢湖を活用する事になり、湖水が大きな変化を受ける事になった。

ここにほろびゆく魚族と湖神辰子姫の霊を慰めるため浄財を集めて、姫観音を建立した。

みほとけよ、願おくは大いなる恵みを垂れたまわんことを。

昭和十四年十一月 榎湖仏教会 田沢湖町」

それまで町史や観光案内書等の資料には建立由来の記録は見当たらず知られない秘められた観音様であった。掲示板の設置で町の田沢湖観光の名所として紹介され公になった。

その年から町の高橋福治観光課長ら有志により、姫観音供養祭が執行される様に

なった。その開催動機は田沢湖に投身自殺者が余りにも多いので、その慰霊と訪れる観光客の安全を祈祷する為という理由であったが私は疑念を抱いた。

碑文と掲示板の字句から考察すると、姫観音建立の主旨を取り違えている事と供養祭そのものが観光に利用する当て付け様に感ぜられたからだ。

姫観音が建立された歴史的背景を知る私には姫観音像に刻まれた文と掲示板の美文に私は納得する事が出来なかった。

戦時下、1938年から40年にかけて田沢湖をダム湖とした国策によって行わ先達、田沢湖、生保内、夏瀬発電所建設。それに係わる隧道掘削工事は、玉川と先達から二つの導水路、そして田沢湖畔田子の木から生保内発電所への導水路が掘られ2年間の突貫工事で進められた。

寒冷と過酷な労働、食糧不足と発破や落盤事故などで多数の犠牲者があった。その中には徴用法による強制労働に従事していた朝鮮人も含まれていた。

田沢寺に眠る朝鮮人無縁仏と姫観音の建立趣旨書を発見(1991.6.21)した事により、姫観音は当時の工事犠牲者を慰霊するために建立された事を裏付ける史実を私は明らかした。

1998年には先達発電所工事に関わる徴用者307名の名簿(1946年厚生省「朝鮮人労働者に関する調査」秋田県覚書)が公開された。

その文書により先達発電所で働いていた曹四鉉氏が私の父母の故郷韓国全羅南道靈岩郡三湖里に生存している事を確認し証言を得た。そして夏瀬ダム発電所工事は徴用された李用鎮氏が横須賀市に住んでいる事も判明、生きた証言が得られた。

その結果姫観音像に関わる建立主旨の疑問は大方解けた。私の告発が虚言でない事の証明が公に出来た。私は1990年より2015年までに田沢湖町民らと共に姫観音の慰霊祭、そして田沢湖の朝鮮人無縁仏供養会を2015年までに11回行って来た。2019年には姫観音開眼80周年記念法要が執り行われた。

—彼岸花—

私は戦後、田沢湖町の生保内小・中学校で学び遊んだ。戦前戦後の生活は厳しく米所と呼ばれる秋田でも深刻で辛かった。

しかし秋田は山の幸、山菜の宝庫であった。山に入れば四季の食料は豊かで、その自然のおかげで生き延びることが出来た。学校生活は我が人間形成の源で、思い出深いものであった。

師の教えは社会生活の指針となり、苦しい時の励みとなった。忠実にその教えの道を歩んで、生かされた喜びは形容し難い。

秋田での19年間、生死はいつも背中合わせであったが恐れも悲壮感も無かった。極貧、火宅の中で生きてきたが太極の陰と陽の哲理の如く、その辛苦を補うものに不思議と守られ、生きて来たというのが私の青春であった。

私は2021年、田沢湖畔御座石園地に「ふるさとの碑・平和の群像」を建立した。その周りに彼岸花の球根を植え、腰掛石(男鹿の自然石)を「令和の御座石」と命名し配置した。

活かされた天と地と人に感謝と報恩の思いから、仙北市の文化振興と観光行政発展を祈念して寄贈したものである。

「ふるさとの碑」の碑文は「ふるさとを 田沢と呼ばん 彼岸花」である。1990年、「朝鮮人無縁仏慰霊碑」を田沢寺に建立した時に刻んだ私が詠んだ鎮魂の句である。

この句には故郷に寄せた愛と、私の哲学と死生観、天国の御霊への感謝の心を込めている。安寧なる世界、平和への希求、万人が念願する普遍の祈りの心と魂を詠んだ。

この碑が共生社会の礎として永遠なる韓日友好の灯となるよう念願すると共に、在日の旅の途中の慶事を分かち合いたい。

私の願いは姫観音前の掲示板解説を補追記し「姫観音は戦争中の発電所工事による犠牲者を慰霊する観音様である」旨の史実を明記して欲しい事だ。このままでは仏作って魂入らず、霊は休まらない。その御霊を慰める心に国や民族の違いなどはないと私は思う。

5. 私塾・清里銀河塾について

—故郷の意味—

ある有名なふるさと論です。

「生まれたところで生き、死ぬる人は幸せな人である。

生まれたところで生きられず、移り住んだところをふるさとに生きる人は、その地を愛する幸せな人である。

移り住んだところで生きられず、渡り歩いて生きる人は、その全てをふるさとにする幸せな人である。」という言葉です。

小林秀雄(文芸評論家)の文に、東京生まれである為に故郷がない、というような表現がある。

小林が言うふるさとは、生誕地という意味だけではない。そこでの情緒や自然、人間関係、風俗や文化、家族や先祖達が眠る土地などを含めているようだ。

高齢期を迎えた私にふるさとはあるのだろうか、としばしば思うことがある。19歳まで青春を暮らした秋田、そこで出会った友人達との交流を通じて過ごした時間は確かであるが、それだけでふるさとと言えるのだろうかと自問する。

秋田に帰って友と歓談し、その一瞬が過ぎれば、どこか余所余所しい風貌を見せ、友が遠くにいるような感覚を覚える。

子供時代、会いたいと思えば会いに行くといった時代が奇跡的なように思える。時間の経過が恐ろしい程の距離を感じさせる。

思えば、それは表面的な関係であり、親友と呼べるような関係ではなかったのだとも言える。

列車から降り、故郷の駅の改札口を通る時、懐かしさより見知らぬ場所に来たような戸惑いと不安に駆られる。

ふるさとというのは生まれ故郷でなくとも折々に出掛け、知人友人、恩師、山河に触れ、魂の交流を積み重ねていかなければ、見知らぬ場所になってしまうようだ。

そこに定着し、そこに家族を形成し、地域の人々と繋がるような人間関係を新たに築き上げ、共に生きて喜びと悲しみを分かち合うこと、それこそがふるさとの意味ではないかと痛切に思う最近である。。

—故郷はありがたきもの—

私が生きた在日 84 年間には日中戦争、第 2 次世界大戦、終戦による朝鮮解放後の朝鮮半島に於ける南北戦争、オイルショック、バブル崩壊、東日本大震災、新型コロナウイルス禍、ウクライナ軍事侵攻等々、暇ない社会変事と自然災禍があった。

人生とはこういうものだと平常心を保ち、これらの変事を潜り抜け生きることが出来たのは、幸いである。

私を育み血と肉を作った故郷は、生誕地の布施森河内(現東大阪市)より、生後移住した秋田県田沢湖町の生保内(現仙北市)。2 歳から 4 歳まで一時住んだ、父母の故郷である韓国全羅南道靈岩。秋田工業高校卒業後に、埼玉県川口市を故郷にして 64 年になる。

もう一つ大事な故郷がある。21 歳の時にふらりと降り立った、浅川巧のふるさと清里(山梨県北杜市)である。

カント学者でリベラリストであった安倍能成著「青丘雑記」(1932年、岩波書店)の中に「浅川巧さんを惜しむ」の文がある。浅川巧さんは「露堂堂」と生きた人であると

書かれていた。1934年、中等学校教科書「国語 六」に『人間の価値』と題して収録され、世の人々に知られる人物である。

私は秋田工業高校 3 年(1958 年)の時秋田県立図書館で「青丘雑記」を読み記憶に止めたことが、浅川巧との出会いであり、その後の清里ライフの基になった。

植民地支配下にあった、朝鮮に生きて朝鮮の人々から愛された稀有の日本人である。巧の生涯は「人間の価値」が実に人間にあり、それより多くでも少なくでもないことを、その生が示した国際人である。

在日で生きる哲学を教えられたのが、浅川巧の生き方である。それは「人間の価値」の一文からである。浅川巧の業績は多くあるが、私の感銘は、その生きる姿、考え方であり、日々の行い、営みである。

浅川巧は、韓国の山河や歴史と文化を、大きく深いところで見つめていた。国や民族を乗り越えた「共生」を考えていた人であった。

私の在日生活は 84 年になる。その間、時代は物質文明のみ目覚ましく進み格差社会となった。人々の心の病は深く荒んで嘆かわしい。私達は不幸であった時代を乗り越え、21 世紀に甦り誠心を込めて友好親善を培い、兄弟であることを忘れてはならないと、浅川巧は語りかけているようだ。

私は在日の生を巧のように「露堂堂」と生きたいと念じた。巧のふるさと清里にも住まいを持って生きた 60 余年、故郷はありがたきものである。

—清里紀行—

忘れもせぬ 1961 年 5 月 5 日のこと。ちょうど私が 21 歳だったときの話である。初夏の新宿御苑で楽しんだ後、新宿駅から中央線に乗った。小淵沢駅で SL を見つけ、急に乗りたくなってホームを降りた。小梅線で小諸まで行く列車だと言う。

シュッシュッポッポ・シュッシュッポッポと喘ぐ様に山麓を進んで行く。後にした南アルプスの山塊、前に現れる八ヶ岳の山容、実に見事な風格を備えた 3000メートル級の峰々に、私の胸は高鳴った。

「清里」という駅に到着した。「清き里」、なんとロマンチックな駅名であろう。私は急いで列車から降りた。降りた途端、身を刺す様な冷気に震え上がった。そこは標高 1275メートルの高原の駅。目の前に黒々とした山岳が迫っていた。八ヶ岳の主峰赤岳であった。私は何のあてもなく清里駅に降り立ったのだった。

牛小屋のような駅舎に、降りたのは私一人。何ともいえぬ寂寥感の漂う旅情を噛み締めた。

山の夕暮れは早い。夕日に染まった八ヶ岳の凛々しさ。遠く南に富士山が望め、雄大な山岳美に息を呑んだ。

駅近くの旅館に泊り、翌朝駅前を散歩した。ここが山梨県の清里村である事が判った。歩いていると、いやに「浅川」「あさかわ」という看板や標札が目に入る。もしかしたらここは浅川巧の故郷ではなかろうかと私の胸は踊った。

私は「浅川巧を知りませんか」と一軒一軒尋ね歩いた。だが、誰一人答えてくれる人はいなかった。「さあ、そんな人の事は聞いた事ありません。」というつれない返事が返ってくるばかりであった。

これは私の記憶違いであったのだと早合点した事が、浅川巧と清里との接点を見出す事が遅れた理由になるのだが、その時の私には気づくべきもなかった。

コメント： 巧の話の間にポール・ラッシュが入っていますが、構成を変えた方が初めてこれらの人の事を聞く聴衆には理解しやすくなると思います

—「人」を作るのが第一の道理—でポール・ラッシュについて触れるのでそこ

に移植した方がわかりやすいかもしれません

—ポール・ラッシュ博士との出会い—

「清里でどこか遊びに行く所はありますか」と宿の主人に尋ねたところ、「清泉寮に行ってみたら」と教えられた。

そこで私は思いがけず偉大な人物と出会った。ポール・ラッシュ(1897年～1979年)博士である。1923年の関東大震災で破壊された東京と横浜のYMCAの再建の為に来日(1925年28歳)したインディアナ州生まれケンタッキー州育ちの宣教師であった。

「イエスは病める人々を慰め癒したではないか。飢えている人々に食を与えたではないか。イエスはしばしば人を集め、有益な話し合いの時を持ったではないか。幼子を集めて祝福し、働く希望を与えたではないか。」とポール・ラッシュは1948年、農村伝導及び農村への奉仕を実践的キリスト教の思想で、清里での教育実験計画、そして戦後日本の民主的農山村復興モデルを作り、実践的青少年教育を目的とする「キープ」を創設した。

病院・農場・農業学校・保育園・清泉寮を建設し、食糧・保健・信仰・青年への希望の4つの理想を掲げ、清里を民主主義に基づく戦後日本再生の拠点とした。

清里の発展の基礎を築いたのがポール・ラッシュであり、「清里の父」「フットボールの父」として敬愛されている。彼のフロンティアスピリット(開拓精神)抜きにして、清里を語る事は出来ない。

崇高なボランティア精神と果敢なフロンティア精神。「日本とアメリカは良い友人になれる。」と、国境と民族を超えた無私の奉仕と博愛・人道主義思想。異郷人が、ましていわんや、日本の敵国であるアメリカ人が戦前・戦後を通して日本での奉仕を実践している遠大な人類愛のロマン。

彼の「最善を尽くせ、しかも一流であれ」という言葉と共に、キリスト教の教えに対して関心と感化を受けた。私は清里に降り立った事を至福と思った。

翌5月6日、私は一人清泉寮を訪ねた。そして応接室のようなホールに入ると、マントルピース前に置かれたソファで、小柄な白人が一人物思いに耽っていた。頬や鼻がほんのりとピンク色に染まって艶っぽく輝いていた。

私が入って来た事に気づき立ち上がると「どうぞお座り下さい」と声を掛けてくれた。この人こそポール・ラッシュ博士その人であった。日本語はそれほど流暢ではなかったが私は片言の英語を交えての会話は進んだ。

「どうしてここへ。どこからおいでになりましたか。」

「マントルピースの上に掲げてある絵に惹かれて入りました。」

「須田寿(1906年～2005年・立軌会創立会員)の「牛を売る人」の絵です。私が日本に初めてジャーズ種をアメリカから持ってきて、この清里で実験的に飼育した牛をモチーフにした絵です。この絵は清泉寮完成祝いに作家から贈られたものです。」

「私は須田寿のザクロの絵がとても好きで画集を持っています。」

「その画集を、一度見たいものですね。」

絵が取り持つ縁で、二人きりで1時間は会話を交わしたろうか。

「ここまで来るには大変なご苦勞があったでしょう。」と問いかけた私の言葉に、ポール・ラッシュの顔が瞬間曇った。

「自分の理想とロマンとのギャップに苦しみました。地元の人々から理解が得られなかった事でも悩みました。実は今も、その事で考え込んでいたところでした。」

異郷の地で、異邦人として奉仕する事が容易い事とは思わないが、ポール・ラッシュの孤独と寂しさを見つめた在日韓国人の私の心に響いた。その時の私自身が孤独の心境、境涯であったからだ。

1979年、2度の再会はあったがポール・ラッシュは清里に大きな光を残して、多く

の人々に惜しまれながら旅立った。須田寿の画集を見せる事が出来なかったことが今でも悔やまれる。

—韓国の土となる—

巧は42歳の若さで急性肺炎のために亡くなった。その死は韓国人からも惜しまれた。ソウルの郊外の忘憂里に「功德之墓」と刻んだ兄伯教がデザインした白磁の供養塔が建立されている。傍らの顕彰碑には「韓国を愛し、韓国の山と民芸に身を捧げた日本人、ここに韓国の土になれり」と刻まれている。

ソウル特別市が管理する、京畿道九里市忘憂里公園市民墓地には、南北分断による不遇の画家大郷・李仲燮(1916年生～1956年没 享年40歳)が眠っている。

李仲燮は韓国美術史で評価の高い現代洋画家である。墓地には張徳秀、韓龍雲、文一平、呉世昌等、独立韓国近現代史を証す愛国人士の墓がある。その近隣には韓国人に愛慕され守られている日本人・浅川巧の墓がある。

浅川巧(1891年－1931年)は、山梨県北杜市高根町に生まれた。山梨県立秋田農林学校卒業後、4年余り秋田県大館営林署で農林技手として務めたが、兄伯教と前後して朝鮮に渡る。

農林技手として植林緑化の普及に努める傍ら、失われようとする朝鮮の美の発掘に貢献した。植民地下にあった朝鮮に生き愛された日本人であるが、30数年前までは生誕地山梨県北杜市ですら浅川巧の事は知られていなかった。

『青丘雑記』の「浅川巧さんを惜しむ」という文を読んで、浅川巧に憧れと感謝の念を抱いた。

人間誰でも自分だけの隠し田を持ちたがるものだが、朝鮮人と向き合った浅川巧は隠し田など一切持たなかった。

自分のルーツが高句麗人だと思っていたらしい浅川巧は、高句麗人の血が故郷の

朝鮮へと、私を呼んでいると告白した事でも、朝鮮への愛の深さがわかる。

植民地下の難しい時代に、両国の故郷でも受ける苦難を、自分の生涯と代わる愛の対象とした。時代は違えどもディアスポラである在日二世の私には、共感する人であった。

巧が生きた時代の植民地朝鮮を考える時、優位にあった日本人が朝鮮人に愛されるという事は、稀である。孤独とわびしさの中で植民朝鮮人のためにヒューマニズムに生き、道義と正義に生きた証がこの墓にはある。巧の慎み深く、朝鮮に優しくった宗教心をも超越した心情がうかがえる基である。

ポール・ラッシュや浅川巧の境涯について思う時、時代と環境は違えども在日という異郷にいるものとして、私は共感し学ぶ事が多い。

—「人」を作るのが第一の道理—

韓国、日本の中学校教科書に唯一紹介されている日本人・浅川巧。しかし両国民には広く知られていない人物である。私は浅川兄弟には今日を生きる普遍的な教えがあり、韓日の人々が共に学ぶべきものがあると常々、思って来た。韓国での功績に反して、今だに知名度が低く残念である。

私は20代から清里の地で過ごすようになり、この地域の風土に育まれた人生を送ってきた。それはこの地に私が憧れ、尊敬する偉人のいる事が関係している。

植民地下、韓国に渡り、韓国人の敬愛を受けた浅川伯教・巧兄弟と、戦前戦後の日米間の激動期を変わらぬ友愛と青少年教育に一身を捧げたポール・ラッシュとの出会いから、韓日の狭間の中で、在日のアイデンティティの学びを得た。

この世に人間愛を教え施された、この先賢は在日を生きる私の師であり、目標であり、シンボルであった。人間として真実の道を切り拓き歩まれた先賢の足跡には、日本の風土に息づき現代を生きる人の心の根に、日本の風土、韓国の風土とアメリカの

風土が重ねて見えてくるものが、在日にはあると思われる。

人を形成するものは「人の真実」であると思う。「人の真実」が誇り高く、求道的であれば風土や人にも準じる。しかし人心が乱れ、荒廃に任せれば風土、人も墮するのではないだろうか。八ヶ岳の山麓、清里の地域風土の中から生まれた精神、浅川兄弟やポール・ラッシュの生き方から学ぶ事の意義と意味を私は見つけたいと思うようになっていった。

私塾・清里銀河塾で何を学ぶのか。学ぶ意味や学ぶ楽しみは生きることそのものである。その基本となるのは「生涯学習」ではないかと考えてみた。

一般人(住民)は自分の為、地域発展貢献のために学んでいこう。職業人は職業意識のレベル向上の為に学ぼう。生涯健康を保ち、元気に生きていく為には、世代を越え、心と体を養うために鍛えていこう。好奇心を持って自分を磨きたい、生涯成長していきたい、頑張る自分でありたいという学びの本能は誰にでもあると思うからだ。

学び成熟する事で本物の自分を確認する。自分の尊厳を見つける事に繋がり、自分自身を慈しみ大切にする。そこから相手を認める人間関係を作り、人を愛する事が出来る、そのような人たちが創る成熟した聡明な社会を創っていきたい。

学びあい、助け合い、共に生きることにより、互いを高め合い自己研鑽を積んでいきたい。多様な価値観の中で自ら学び、共に学ぶということは自己が決定することで、生涯学習はつまり自己教育なのである。学びを楽しむ文化を創造していきたい。

具体的には浅川兄弟やポール・ラッシュが生きた時代から、その精神と哲学、その背景にある歴史を学び、故郷の誇りを高めていきたい。大自然の中で、彼らを育んだ風土の「気」を感じせしめ、次世代を担う青少年の健全なる育成により誇りと自信を与えたい。

清里から富士を仰ぎ日本を考え、愛するそれぞれの故郷を見直し、世界を望む。自然を楽しみ、我らが生きる環境を考える。その大気の中で五感を蘇生させ鍛え、教

育のもつ意味と意義、人格や人間の価値を学び、地域貢献と国際交流を促進させる。

私は、それらをサポートし、エールを送りたい。

私塾・清里銀河塾で出会い、共に学び生きる喜びや想い、更なる高みを目指したい。

国際理解と友好親善を目的に、韓日青少年交流を促進し健全なる青年活動家の養成である。清里銀河塾は、「ひびきあう心—浅川兄弟とポール・ラッシュの精神」をキャッチフレーズに、若者達とも生きる事を「楽しむ」「伝える」「深める」「創る」「演出する」をカテゴライズし、響きあう学びを進めていきたい。

—浅川伯教・巧兄弟顕彰碑建立—

私は2006年より私塾清里銀河塾を19回開催した。これまで学んだ塾生は1000人を超えている。今日の講義は第20回目の私塾・清里銀河塾でもあります。

共に学び善き追憶を辿り、先人の徳を慕い回顧する事は、相互理解が深まり国際親善の糧となる。

韓国では韓国人に墓が守られ、生誕地山梨県北杜市でも顕彰されるようになった。両国から愛されている人物でありながら、地元の故郷に顕彰碑が建立されていない事を私は長年淋しく思っていた。

ポール・ラッシュ博士は「清里の父」と呼ばれ、顕彰碑も建って敬われ、聖壇にも祀られて久しい。

私は浅川兄弟もいつの日にか、聖壇に祀られる人物であると1997年の浅川兄弟を偲ぶ会総会で講演をした事があります。それ以来、いつの日にか石に刻みブロンズ像を配し北杜市に顕彰碑を贈ろうと20数年間、構想を温めてきました。

2021年は浅川巧の生誕130周年没後90周年記念の年に当たる。6月13日、浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会結成25周年を記念して、「捧ぐ 敬愛と感謝を込めて」私の座右である「露堂堂」の碑文を添え、兄弟のブロンズレリーフの顕彰碑を生誕地に

建立し、祈りが叶うことになりました。

碑のデザインは五重塔をイメージする五層(五段)。碑石は上野公園の王仁博士碑に倣って下層四段は国産の稲田石を割り肌仕上げ。上層は韓国産谷城石を本磨きにして、彫刻家・張山裕史氏作の浅川兄弟レリーフを配した。碑文は甲府市の書家・狭山植松永雄氏の揮毫による「露堂堂」であります。

安部能成著『青丘雑記』「浅川巧さんを惜しむ」の文中にある「その人間の力だけで露堂堂と生き抜いて行った」から顕彰文に採用し、刻むこととなりました。

来る2023年8月には、北杜市は京畿道抱川郡姉妹都市締結20周年を記念し、資料館前広場をミニ庭園化することとなった。

名実共に聖壇の夢が正夢となった。浅川兄弟の偉徳の賜物であります。韓日友好の絆を結ぶ交流の広場になることを祈念します。

—終わりに—

「人間として最も大切なことは生きることである」と梶五定学芸大学教授が著しております。

本日は学芸大学の外国語・外国文化研究講座で、日本で生まれ、日本で育ち、生きた歳月の一端を振り返りお話し出来ましたこと光栄に思います。

人生はこう生きても、ああ生きても一生は一生です。同じ一生を生きるならば、人の為に世の為に生きるのが道理であると思います。

私がこう生きましたという話の一端が皆様の学術や研究に少しでもお役に立てるならば、私が生きた意義があったものと思います。

「多文化共生社会を生きる」社会の構築は世界の必須課題です。社会の投資と奉仕が一層求められます。

皆様の献身に敬意と感謝を申し上げ、この講義を終えたいと思います。ありがとう

ございました。